

<止まった刻 検証・大川小事故>第4部 緊迫(2) 空のバス目撃「駄目かも」

03月01日 12:57



東日本大震災による津波で、宮城県石巻市大川小は児童74人と教職員10人が犠牲となった。学校から約3.7キロ離れた沿岸部を襲った津波の目撃情報は、校庭で待機する教職員らに伝わり、情勢は一挙に緊迫する。第4部は当時の児童や住民らの証言を基に、3月11日午後3時25分ごろから津波襲来までの状況を再現、検証する。(大川小事故取材班)



水しぶきが上がる新北上大橋の橋脚。震災当日は午後3時26分ごろ、津波の第1波が到達し、その後、水位が上昇したとされる=宮城県石巻市

(河北新報)

◎15:25～津波襲来

海岸沿いの松林(松原)を越えてきた津波を目撃し、Uターンした石巻市河北総合支所の広報車3台が目指したのは、北上川右岸の堤防道路(三角地帯)だった。標高6～7メートル。大川小の校庭より5～6メートル高い。

広報車3台は3月11日午後3時30分ごろまでに三角地帯に着いた。沿岸部に向かう車を制止するとともに、1号車の拡声器を通して釜谷地区に繰り返し避難を呼び掛けた。

1号車を運転していた山田英一さん(62)は「小学校には呼び掛けが伝わっていると確信していた。釜谷全体に聞こえればと思った」と話す。2号車の及川利信さん(64)は「教職員が誘導し避難させているかなという感じで、(児童が下校しているか)考える余裕がなかった」と振り返る。

Uターン後、3台は大川小には立ち寄りなかった。津波から逃げるので精いっぱいだったとみられる。教職員11人と児童約80人がまだ学校にいた。

山あいの入釜谷地区に住んでいた女性(45)は午後3時25分ごろ、当時4年の長女(17)=高校2年=を車で迎えに来た。校庭に入ると、すぐに担任の男性教諭=当時(27)=と目が合った。

担任は「お母さん来てるよ」と長女に声を掛けた。「引き渡しのチェックをしている時間もないので、いいよ、帰って」。教員たちの焦りがうかがえる。

助手席に座った長女は運転席の母親に顔を伏せ「早く帰りたい。怖いから帰りたい」とおびえていた。

女性が車を出すと、男子児童の母親が泣きながら校庭へ走って行った。パニック状態だった。他にも校庭へと急ぐ複数の保護者が目撃されている。別の女性保護者は午後3時29分、「小学校にいます」と夫に携帯でメールした。

「センター(釜谷交流会館)を開放します」。午後3時25分前後、地元の女性の声が校庭周辺に響いた。会館は大川小とともに市の津波避難所に指定されていた。外の気温は1度。「お年寄りが寒いから(会館を)開けると聞いた」と児童は記憶する。

大川小のすぐ近くに住んでいた菊地亨さん(86)は外出先で大津波警報を知り、帰宅途中、北上川の引き波を見た。

「大津波が来る。会館では危ないから山か峠さ走れ。一緒に車に乗るか」。会館に向かう近所の住民に声を掛けたが、「無視して行ってしまった」と悔やむ。

上流の水位計から推算すると、午後3時26分ごろ、津波の第1波が新北上大橋に到達したとされる。この頃、児童たちは校庭の中央付近に集まっていた。列は崩れ、円のような形になった。地面は降雪で少し湿っており、尻をつけずに座ったり立ったり。手を合わせて寒がる様子を住民が目撃している。

午後3時25分前後、菊地さんは、県道で待機していたスクールバスがバックで校門に入っていき様子を見掛けた。男性区長が誘導していた。車内は空だった。

富士川につながる近所の水路の升から噴水のように水が上がり、富士川の堤防(標高3.1メートル)からは水があふれてきた。

「正直、子どもたちは駄目かもしれないと思った」。不安を抱きながら、菊地さんは約3キロ離れた釜谷峠に向けて車のアクセルを踏んだ。